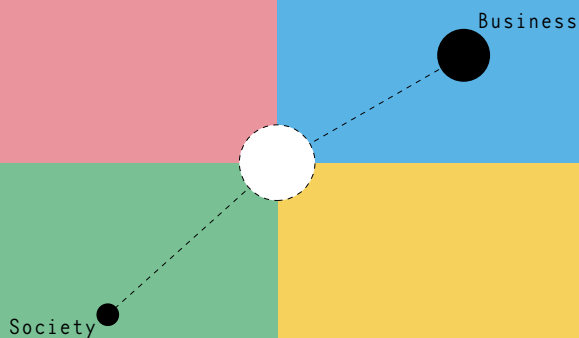


松田道人



まつだみちひと：
国内初のファイル共有ソフト「ファイルログ」を提供する日本MMO社長。現在、日本レコード協会会員など19のレコード会社と、日本音楽著作権協会（JASRAC）から、市販の音楽CDから作成されたMP3ファイルをサービス対象としないように求める仮処分申請を受けている。



ハードとソフトの両輪

私は音楽の著作権に対して新しい形ができるのではないかと思っている。それは、これまでのファイルロークと日本レコード協会およびJASRACとの論争を見ていただければわかると思うが、ここでは現在裁判中ということで詳しくは書けない。しかし、そのような観点から放送というジャンルで現在起こっている問題を見てみよう。新しい枠組みが必要だという考えに至ったわけがわかりたいと思う。

昨年あたりから一般家庭にも高速回線が普及し、さらにパソコンの処理能力も向上したことで、インターネットを使って各家庭に動画を配信することが技術的に可能となった。しかしながら、ブロードバンドでおもしろい映像コンテンツは流れていないようだ。放送と通信の融合が「ソフト不在」のまま行われていると言ってもよいだろう。なぜ、ブロードバンドでの動画配信も、他メディアと同様、コンテンツ不足に陥ってしまったのか。考えられる原因を、放映権、通信業界と放送業界との関係、通信業界のコンテンツに対する意識、の3点から検討してみることにする。

まず、放映権の問題であるが、これについては今年のW杯をインターネットで配信する企業が世界中に1社もない、という事実がすべてを表している。W杯といえば、オリンピックと共に世界でもっとも価値あるコンテンツの1つであり、世界中でCATVや衛星放送など新しいメディアが普及する原動力となってきたものである。この時期に「ブロードバンドでW杯を観よう!」という宣伝コピーを大量に目にしてもおかしくないものであるが、残念ながら今大会の試合映像はインターネット上では一切配信されない。W杯放映権を管理するドイツのキルヒ社が、インターネットによる動画配信を認めなかったからである。

キルヒの眼には、インターネットが脅威に映ったのだろう。インターネットには国境がないために、独占放映権を世界で1社にしか売れなくなるからだ。FIFAから一括で仕入れた独占放映権を世界各国に卸す、という同社のビジネスモデルが根底から覆ってしまうのである(もっともキルヒはすでに経営危機状態にあるが)。

W杯の話はほんの一例だが、映画やその他のソフトについても、守られるべき既存の枠組みがあるという点では似たような問題が発生する。放映権を巡る利害関係者は多岐に渡るため、調整には時間がかかるだろう。

要はお金の問題なのだが、インターネット事業者が、少なくとも既存のテレビ局以上の利益を権利者たちに還元する仕組みを作らない限り、いわゆる「インターネット放映権」を獲得するのは不可能に近い。権利者が、今あるテレビ放映権収入を減らしてまでもインターネットにチャレンジする必要性はないからだ。

さらに厄介なのが、プロ野球を始めとした人気スポーツの多くが、資本関係上テレビ局の傘下にあるという政治的な問題である。いずれにせよ権利処理の枠組みが整ってない現状では、コンテンツに含まれる権利者のうち1人でもNOといえ、配信ができなくなるということをおぼえてはならない。インターネット企業が人気コンテンツの放映権を獲得するのは至難の業なのである。

次に、放送業界と通信業界の関係が良好でない点である。競合相手なのだからあたりまえだという意見もあるが、それは間違っている。地上波放送局は、日本最大のソフト制作会社だ。コンテンツ提供者として今後も付き合いがかねばならない。スカパーが、地上波との協調路線を図ったのもその辺の戦略だったのだろう。日本のキラーコンテンツの大半を握る地上波放送局を敵に回せば、ブロードバンドにおける映像コンテンツ不足はますます深刻化するであろう。日本の金融機関が規制緩和後に競争力を失ったのに対して、放送業界は依然として高い競争力を維持している。放送局を放送局たらしめているのは、規制に守られてきた部分ではなく、彼らのソフト制作力であったということができるだろう。

3つ目は、通信業界で働く人々のコンテンツに対する意識の問題である。たとえば、今年のW杯をインターネットで配信するために、実際に権利者と交渉を行ったブロードバンド企業があったらどうか。インフラさえ用意すればコンテンツなどは後からついてくると考えている人が通信業界には多い気がする。iモードの成功体験が逆に足かせになっているようにも思える。

今こそ、「ハードを売るためにはソフトが必要だ」という企業側の論理から脱却して、「ソフトをみるためにはハードが必要だ」というユーザー本位の姿勢を取ることが大切ではないだろうか。

放送に参入できるようになったと喜ぶのはまだ早い。ハードとソフトの両輪があって初めて「放送」なのである。課題は山積みである。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp